

奇跡は起こらなかったけれど、
自然の摂理に「おまかせ」して、
いまはとても幸せです

金澤泰子さん 書家

「ダウン症の書家」として知られる
金澤翔子さんのお母さまです。

この子と死のう……と、何度も思い詰めた。
でも、ある日、気づいた。この子は、天使だ。
泰子さんは、どのように娘さんと向き合い、
どのように壁を乗り越えてきたのでしょうか。

1985年6月。翔子さんが生まれました。待ち望んだ子は、ダウン症。知能も育ちにいくと医師に告げられました。

その日から始まった、苦しみと悲しみ……。当時の泰子さんの日記から、いくつか抜粋します。

(生後五十二日目) ミルクの量を薄くしてしまったりして、その後すぐに後悔に悩む。翔子が大きくなるのが怖い。

(七十五日目) 翔子の存在が悪いのではない。いけないのは私の自尊心なのだ。

(八十四日目) 翔子はまさに天使だ。(中略) 翔子が私の涙を拭いた。小さなお手で。私は翔子にすがった。

絶望の谷底で人生を呪い、あがきながら、少しずつ、泰子さんは娘さんと生きる決意を固めていきます。

親子で孤独のなかに引きこもり、書き続けた「般若心経」

翔子さんが5歳のとき、泰子さんは自宅で書道教室を開きます。

長年、書を嗜^{たしな}んできた泰子さんにとっては、自然なことでした。自分自身の気持ちを穏やかに保つためにも欠かせない選択でした。翔子さんも母の教えで筆をもちます。

翔子さんが10歳のとき、それまで通っていた普通学校に通えなくなりしました。母子はふたりだけの孤独な世界に引きこもりました。あまりのやるせなさに、泰子さんが翔子さんに書かせたのが「般若心経」です。

「自分の苦しい気持ちを翔子にぶつけるように、何枚も書かせまし

た。教えるというより、叱りながらです。翔子は泣きながら、何千字も書いたんですよ」

母の苦悩を感じとってか、翔子さんは涙を流しながら書き続けます。一行書いては「ありがとうございました」と。これが後に「涙の般若心経」と呼ばれる書です。

翔子さんが20歳になって、はじめての個展を開きました。それは翔子さんが14歳のとき急逝した夫との約束でした。

翔子さんの伸び伸びとおおらかな書は、思いがけず、大きな反響を呼び、高い評価を得ました。

2005年、書家・金澤翔子が誕生しました。

「自立する力をつける」

「孤独に強い子に育てる」

この20歳になった年に、翔子さんは「30歳になったら一人暮らしをする」と宣言しました。

「私の心配する気持ちを汲んで、





翔子さんの地元、東京都大田区の久が原商店街にオープンした「画廊・翔子」。代表的な書の数々が展示されている。開廊中は無料で鑑賞できる。取材時には、翔子さんが10歳のときに泣きながら書いた「涙の般若心経」が展示されていた。

かなざわ・やすこ

1943年、千葉県生まれ。10歳で書道を始める。1966年明治大学卒業。書家の柳田泰雲・泰山に師事。1990年、東京大田区に「久が原書道教室」を開く。現在は翔子さんのサポートをしながら、執筆・講演活動を行っている。著書に『天使がこの世に降り立てば』（かまくら春秋社）、『金澤翔子』（平凡社）ほか。

金澤翔子（かなざわ・しょうこ）

1985年、東京都生まれ。5歳で母から書道を教わる。2005年、銀座書廊で個展。法隆寺、東大寺、出雲大社等々の名刹、大社で個展、奉納揮毫を行なう。

翔子はそう言ったんですよ」

障がいのある子を持つ親のいちばんの心配は、自分たちが死んだあとのこと。

泰子さんは、著書にこう書いています。「私の亡き後。どれだけ人に迷惑をかけずに生きてられるか。これが一番大事なことで、私は二十余年、この一点を見つめて翔子を育てていると言っても過言ではない」と。

泰子さんが娘のために決めていたことが、2つあります。

ひとつは、「自立する力をつける」こと。そのために、とくに料理はしっかり教えこみました。翔子さんが何度失敗しても、最後までやらせました。

もうひとつは、「孤独に強い子に育てる」こと。書道を選んだのは、長い静かな時間を必要とする書の道こそ、翔子さんに最適だと考えたからです。

宣言通り、30歳になって、翔子さんは一人暮らしを始めました。

「あの子には、将来のことを考える力はありません。だから、いま、

目の前のことだけに集中している。そのことが、書にもあらわれているんですよ。いま、自分の目の前にいる人たちに喜んでもらいたい。その一心で書いているんです。だから、私たちにはかなわないう、自由な魂のような書が生まれるのです」

“私も翔子の心のなかで永遠に生きていられたらいいな”

翔子をどう育てたらいいか、わからない……。暗い谷底にいたころ、泰子さんは毎日、こう神さまに言いつのつていました。

「いますぐ、私の目の前で、翔子を治してみせろ」と。

もちろん、そんな奇跡は起こりませんでした。

それでも、今は幸せだと泰子さんはおっしゃいます。

「あの苦しみがあったから、いまの幸せがあるのだと思います。翔子がダウン症だからできたことも、たくさんある。長い時間がかかりましたが、奇跡のようなことが起こったのかもしれないね」

翔子さんが生まれて1年半ほど経ったころの泰子さんの日記には、こう書かれています。

「私はこの頃、泥の中にも、路傍の石のような物にも輝くモノを見てしまうようになった。翔子の誕生がそうさせた。」

奇跡は、泰子さんの心のなかで起きていたのです。

「翔子はいまも父親と会話することができんですよ。この前も（お母様に怒られました）」と報告していました（笑）。彼女の心のなかで父親はずっと生きています。私も翔子の心のなかで、永遠に生きていられたらいいなと願っています」

泰子さんは、今年79歳。不安がないわけではありません。

「でもね、翔子を見ると、自然の大きな摂理のなかで生きているんだなと、あらためて感じます。ですから、たとえ大変なことが起こっても、自然の流れにまかせるつもり。『おまかせします』と口にする、少し楽になれる気がします」

